
時をかける翼

ゆう一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時をかける翼

【NZコード】

N6901D

【作者名】

ゆう一

【あらすじ】

AD1000年のガルディア王国。そこに一人のクロノとゆう少年がいた。クロノは、お祭りで、謎の少女マールと出会ったのだつた。

プロローグ～始まりを教える朝～

時は

流れる

刻々と

僕らをのせて・・・・・

カコン カコン

リーネの鐘が誰かを呼んでいる
時がきたこと知らせるよ、ついに

クロ・・・・・クロ・ノ・・・

クロノ。

『ああ～だつて、今日は、1000年に一度のお祭り、千年祭だよ？』

『あなた、昨日は興奮して眠れなかつたんでしょう？』

母に起こされやつと起きた寝癖で髪がツンツンの赤毛の少年は、クロノ。ながい夢からめざめたように起きた

『うふあ～、母さん。おはよ～』

まぶしい朝の光が、部屋をつつみこんだ

『いつまで寝てるの？！起きなさい！…！』

『クロノつたらー！…！』

クロノは眠気まなこをひきつて母さんに答えた。

『いいから、早く準備しなさい。今日は、幼なじみのあの発明家のあの口……なんだっけ、とあります。その口発表があるんですね?』

『う~』

『幼なじみ 発明家』

クロノはまだ、起きたばかりで頭が働かなかつた
でも、
すぐにはつとした

『ど~してもつと早く起こしてくれなかつたんだ~』

『何、言つてんの~何度も起こしたわよ』

クロノは、寝癖のまま部屋を飛びだした。その後をクロノが飼っているネコが追つ

『クロノ!』

『何?』

『これもつていきなさい。』

クロノの母は、クロノに少しばかり多目に金を渡した。
クロノはビックリした。クロノ父はずいぶん昔に亡くなつたから、
うちがあまり、そんなに金がある方じやなかつたから。

『こんなに沢山？いいの？』

『だつて今日は、千年祭よ？いつも、クロノには手伝いしてもらつ
てるから』

『そうか。ありがと』

『大事に使ってね』

クロノの母は、にこりと笑つた

『あ、そのかわり、あなたが拾つてきたネコのキャットフード買つ

てきてね

『ああ～分かったよ。じゃ行ってくるね』

クロノはさう言つて家を飛び出して千年祭が開催されている広場へ向かった。

そしてその時は、思いもしなかった。

今日のこの時から、始まる時の冒険を……

バンバン・・・・・・

祭の始まりを知らせる、花火がなった

『はあ・・・はあ・・・はあ・・・間に合つた・・・・・』

広場には中央には噴水があつて、いつもとちがい、飾りなどがあつてその周りをかこむように、アクセサリーショップや鍛冶屋いろんな店が並んでいた。そして、子供達はうれしそうにかけまわっていた

クロノは、噴水の奥にある階段を昇つて、この国のシンボルであるリーネの鐘を駆け抜けようとした。

その時

“ドス”

横から何かがぶつかつた

『キヤー！』

カコン カコン

リーネの鐘が鳴る

何かをじらせるよつて

クロノはぶつかった衝撃で倒れた

『つづつ痛～』

起き上るとそこには、金色の髪をしたボニー・テールのかわいらしきクロノとおんなじぐらいの歳の女の口が倒れていた。

クロノは、つかさず、その口にかけよった

『だ、大丈夫？！』

女の口は起き上がった・・・

『う、大丈夫』

クロノは、その口を見て・・・

どこか・・・懐かしいようなそんな、感覚におちいった

女の口は、何かを確認するよつて自分の首を触った。

『あれ？ ペンダントがない・・・』

『ペンドント？』

クロノはその辺を見渡した。すると、何か光る物を見つけたクロノ
はそれを拾つた
なんか、古そうな水色のペンドントだった

『もしかして、これの事？』

『あ、ありがとう、これ、すっつつじい大切なものなんだ。』

女の口は、嬉しそうに言つた

『そりいえば、君の名前は？』

『お、俺？？俺はクロノだよ。君は？』

『え？ 私、私はえっと……マール、マールだよ』

『名前を聞いたが、やっぱりクロノの知らない「」だと思つた

『ねえ。クロノ！ もしかして、一人？』

『うん。そ、だよ～』

『ね。一緒にお祭りまわってくれない？』

『え？ ー』

クロノはビックリした、女の「」と一緒に歩くなんて、幼なじみのア
イツぐらいだったから

『だつて、一人じゃ寂しいんだもん。ね？ お願ひい』

『う～ん。』

クロノはすこし考えた。

『うん。いいよ！ 僕も一人だし、でも、僕の幼なじみがこの広場の

奥で発明の発表するんだ。それに付き合ってくれる?』

『うん。いいよ。』

『わう。じゃあおじさんへー。』

『わーい。やつたー』

マールはすぐ嬉しそうに喜んだ

クロノ達は、広場の奥へ向かった

が、広場の奥の入口にはがっかりした男の人立っていた

『あの~すみません~発明の発表はあ~?』

『あー今ちよっと準備に遅れてるから、祭でも回ってきてくれない?』

『うやうやしく、時間を潰した方がよさそうだった。』

『残念~じゃ~クロノまた、来ようか』

『うん。 そうだね』

『ねえ～クロノ！ 私、見たいお店があるんだけど』

『うん。 いいよ。 行こうつか』

クロノ達はまた、歩いてマールの行きたい場所へ向かった

『クロノ～！ ひつひつち

その店は鍛冶屋の様で、剣などがおいてあった。

店の主人はすこしかわった服をきた白い髪で年をとった老人だった。

『いらっしゃい

『わ～キレイな指輪～』

どうやら、武器以外にも宝石をおいてある様だった。

クロノは、店に置いてある刀に手についた

『おじょいわせん。そのペンドントわしこよこ見せてもらわんかの
?』

『え? これ? もう?』

鍛冶屋の主人にマールはペンドントを渡した。

『ふ~む。』

鍛冶屋の主人はしばらくマールのペンドントをしわだらけの大きな手で、ペンドントをつつまじむようにもち、目で確かめるようつゝ、見つめた

『おじょいわせん。このペンドントは、ドコで手に入れたのですかな
?』

『そのペンドントは、亡くなつたお母様にもひつたの』

その時思つたクロノは思つた、マールもクロノと同じで親を亡くして、いたんだと

『やがて、あの～もしよかつたら、そのペンダントをわしこねます
てもうえないかな?』

『え?...これを?』

『おじいさん、これは・・・」の口のとでも大切な物なんだか
ら、あげられないよ・・・』

『クロノ・・・『じめんなさい。おじいさん』

『いやいや、すまんね。そのペンドント^{記憶}にかで、見た記憶があ
つてね。』

『やがての?』

『あ～だが、わしのぶ～やひみまちがこだつたよいつば』

鍛冶屋は続けた

『やがての?』

『え？！こいんですか？』

『ああ～。失礼なことをしてしまったからな』

『あいがといわざれこまかーー..』

『やつたね！クロノ』

『マール、そろそろ時間だ行ひー..』

『うん..』

とクロノ達はその場を離れよしつとした時だった

『ちよこと待つておくれ』

鍛冶屋のおじいさんがまた、話かけてきた

『わしの名前は、ボツシユージヤ鍛冶屋をやってあるが剣を鍛える事
もやつてある、その剣がくたびれた時はいつでもきなさい。わしは
こここの地とおりよつと離れた島にいるからな』

『わかりました～！..』

そして、クロノ達は、鍛冶屋をあとにした。クロノ達が広場の奥につくと、すでにたくさんの人達が集まっていた。

『うわあ～沢山の人だね～』

マールは、自を輝やせていた
クロノ達の目の前には、人が一人立てそうな、屋根つきのステージ
らしくものが一つあった

『ねえねえ、クロノ、あれはなんだろうね？』

『さあ～なんだろう？あので、誰かが歌うとか・・・』

クロノ達が色々と推測をしてる間に、一人の少し太った中年の男が現れた。

『さあさあさあ、おまたせいたしました！～これから私の娘・・・ルッカの発明を発表したいと思います！』

男がそうゆうと、奥の方からメガネをかけたおかっぱのいかにも、
賢そうな女の子がスタスターと歩きながら出てきた。

『みなさん。こんにちは。今回は、私の発明をみに来ていただき
うありがとうございます。』

そう、挨拶すると、ルッカはクロノ達にさずいた。

『クロノ！』

『よー・ルッカ』

すると、ルッカは、クロノのとなりにいる、マールを見た

『まあ！クロノつたら。いつのまに女の子をくじいたのよ？』

『ああ、この「はせつき」で会ったんだ、マールっていうんだ。』

『

『よーしぐね。ルッカ』

『わあわあ、ルッカ、話はあとあと…』

『ああ～そうね、父さん』

そう行つて、ルッカは元の位置に戻つた

『今回、私が発明したのは、ワープをできるマシンです。』

『ワープだつて！クロノー！』

『ワープといつても、そんなタイムマシンみたいにドコかに飛ばされるわけではありません。まず、この右側のステージに立ちます。どなたか、試してみたい方いますか？』

『俺！やりたい！』

クロノはまつやさに手をあげた

『じゃ、クロノーのステージに立つて』

『おじー。』

クロノはガツツポーズをした

『ええ～ずるい～クロノ～私もやりたい～』

マールは悔しいそうに言った

『じゃ～！始めるわよ～！父さん～そつちよろしく～。』

『あいさー。』

ルッカは右のマシン、ルッカの父は左のマシンについてた

『スイッチオン～！』

そういうて、スイッチをおした後、ルッカとルッカの父は、マシンについているレバーを全力で回した

二つのマシンの間には、電流が流れはじめた
すると、クロノの体が光はじめた

『わ！なんだこれ？体から・・・』

何かを言いかけたとたんクロノ体は、光に埋もれ消えたとたん
ルツカの父側のマシンが光出した。
すると、そつちのマシンにツンツンの赤毛が見えたと思えばクロノ
が出てきた

『今わすへ』

クロノが登場したとたん、その場にいた人、全ての人が『お~』と言つて拍手をした

『ねえ、ねえ、ルッカ！！次、私にやらせて、お願い』

「え？！」

『いいじゃないか、ルツカ・マシンの調子もいいやつだし』

『でも、私の計画では一回だけだつたんだけだな・・・』

『ねえ！クロノ！イイでしょ？』

『え？ 分かんないけど・・・いいんじゃない？』

『やつた じゃあまつせまつ！』

『まあ、大丈夫でしょう』

ルツカはマールの嬉しそうな顔を見て、ほがらかに言った

『わかったーでは、次は、この口をやつてみましょいー。』

ルツカの父がスマイル満開でお姉さんと言つた
クロノは、元いた場所に戻つた

『それでは、はじめますー。』

マークがルック側のステージに立つた
ルックとルックの父はマシンについて

『スイツチオソーン！！』

ルツカとルツカの父はまた全力でレバーを回し始めた

すると、さっきの様にマシンとマシンの間に電流が流れた。

そして、クロノときと同様に、マールの体が光出したが、それと同様にマールのペンダントも光出した

「な、何????? ペンダントが……」

すると、マシンから急にギガギガと奇怪な音がなりはじめた

『なんだ？？これは？』

ギガギガギガギガ

ペンドントの光は、マールの体をつつみこんだ。

その瞬間、マシンとマシンの間の電流がまじわり、ゲートのようなものが現れ、光となつたマールはまた、マールに戻りマールをのみこんだ

クロノは、急いで、マールを追いかけようとしたが、ギリギリで間に合わず、ゲートはマールとともに消えた。

辺りは、シーンとした……

『さあ！さあ！女の子は、みこと姿を消しました！これにて閉会します～』

ルッカの父は、慌てて言った

その場にいたお婆さんは、何が何だかわからず、その場をさつていった。

『ル・ルッカ、いったいどうゆう事だ！あの子は消えちましたよ！』

ルッカの父は、ルッカにしがみついていた。

それによって、ルッカは冷静に何か、ブツブツいいながら、考え

ていた

『マシーンの力では……あんな空間は開かない……別の何かの力が働いて……でも、それは、……』

クロノは、辺りを見渡した。すると、マールがいた所にマールのペンダントが落ちてあった。

クロノは、ペンダントを握り締めて、そして、首にかけた。

『ルッカ……もう一度、マシンを動かしてくれ』

クロノは、いつもと違つて真剣な顔つきでいった。

ルッカは、クロノが首にかけているペンダントを見てはつとした

『なるほどね。……クロノ、あなた行くのね。男はもうでなくちや。父さん、急いで準備して……もう一度やるわよ!』

『なんだかわけわからんけど……あいせー!』

『父さん!…私の計画では、発表は、一回のはずだった。だから、マシーンもやうやく動くとはが、いらない!…この中の、100倍で回して!…』

『あいあこわーーー!つかしておけ!』

『スイッチオンー!』

ルツカとルツカの父はいつもより力いつぱいレバーをまわした。

ぐるぐるねんぐるぐるねんぐる

『モーテルヒート』

あいさ！

ぐひひひひおんぐひひひおん

卷之二

『あいたー！あいたー！』

ぐおんぐおんぐおんぐおんぐおんぐおんぐ

『そらうじかんじ!』

するとマシーンの間から電流がビリビリと流れだし、強烈にからみあつた

『ペンドントは光だし、マールのみにクロノを包み込んだ
クロノー！私も原因をつきとめて後を追うわー！』

ルツカの声がかすかに聞こえた・・・

クロノは、意識をつしなった

そして、ゲートの中に消えていった。

プロローグ～始まりを教える朝～（後書き）

この物語は、クロノトリガーとゆうゲームから元につくりました。ストーリーがとってもよくできていたので、書いてみるとこじました。

がんばって、最後まで書いてみたいと思います！！

N01 消えた王女～400年の時を越えて～ 前編

意識が戻ったクロノは

不思議な空間の波に流された

すると、目の前が暗くなり空間の出口に出た

そして、暗い闇がぬけ、目の前が明るくなり、周りの景色が見えてきた

クロノは気がつくと見たこともない場所に立っていた

『エーリは・・・・・ビージだ?』

クロノはマールを探すため、ここはひとまず動いつて思いおもむろに歩きだした。

すると、谷がありその下には川が流れていた。そして、向こう岸に渡れるように、
橋がかけてあつた。

クロノは、どこかの山にでもたどり着いたのかと思い、とりあえずその橋を渡つた橋を渡ると、そこには、頭がツルツルで触角があつて目がギロリとした人間と同じく2速歩行の奇妙な2匹動物が、緑の丸いぶつたいを蹴つていた。

『なんだ、こいつら・・・・』

クロノは、そーと通りすぎようとしたら、1匹の世にも奇妙な動物がギロリとクロノ方を見て緑の丸いぶつたいを蹴つて、クロノの顔面めがけてぶつけてきた。

クロノは、とっさに顔をガードした。

『ひひひ、人間がこの山へくるのはめずらしいな

奇妙な動物がしゃべつた

『しゃしゃべつた!』

クロノはびっくりした。

すると、クロノにぶつかった緑の丸いぶつたちは、耳がでてきて、2本の足がでてきて、緑のこれまた、奇妙な動物になつた。

『久しぶりの獲物だやつちまえ～』

すると、奇妙な動物はクロノめがげて襲つてきた
クロノは、無我夢中で、腰にまみつけた。鍛冶屋のボッシュからも
らつた刀をふつた。

シャキーン

グサ

『ぐえ～～～～～』

奇妙な動物は倒れてそして、消えていった。

『うわあ～～～いつ、人間なくせして、強ええ～に、逃げる～』

そういうて、奇妙な動物は森の中に消えていた。

『いたついなんなんだ・・・あいつらは・・・でも、よかつた、
もしもの時のために、剣術をみにつけておいて・・・』

クロノは、しばらく動搖しつづいていたが、こんなやつ等いたらマールが危ないと思い、いそいで、山を下りた。

山をおみると、そこには、自分が住んでいたガルディアとさほど変わらない町並みが並んでいた。

『君は……ガルディアなのか……？』

だが、どことなく、クロノが住んでいたガルディアとは違つていて、どこか、悲しげな感じにおぼえた。

『おや、見かけない顔だね』

クロノはまた、あの奇妙な動物かと思い、びっくりして、力に手をやつた。

『おおい、まて！　俺は人間だ！』

『な、なんだ、人間か……』

クロノはほつとした。クロノ後ろから声をかけた男は、頭にターバンをまいていて、髪が黒く長く後ろでたばねていた。

『俺は、冒険家のトマつていうんだ。ここ最近は、こんな世の中でもいいでどどまつていてるんだ。君も冒険家かい？』

『俺は、クロノ、たしか、今日は千年祭のはずだけど……どうして、こんなにひつそりとしているんだ？』

『せんねんさいだつて？　とぼけるなよ。今はAD・600年だ』

『なんだつて？』

クロノは唖然とした。まさか、400年前にタイムスリップしているとは思わなかつたからだ。

『それに、今は祭りなんでやつてる場合じやない。祭りなんかやつてたら、この国は魔王にのつとられちまつば』

トマは、煙草にマッチで火をつけた。

『まーまあつへへへへへ』

『お前、魔王のことを知らないのか？今は、人間と魔族の戦争中だぜへ。』

トマは、煙草をくわえながら言つた。

クロノは思い出した。昔、ガルディアの地は魔王がいて、魔王と人間が戦つた話を、でもそれは単なる迷信だとずつと思つていた。

『まーまさか・・・』

クロノは、こんな時代にマールが一人さまよつていると想つと、頭の中が真っ白になつた。
そして、はつとした。

『トマ、マールつ子を見てないか？金髪のポニーテールの女の子なんだけど』

『金髪ね、もしかして、リーネ様の事か？さつき、城のやつらと三
から出てきたけどな』

クロノは、メールの事だと思い、そいで、走った。

『おーい！何かあつたら、町の宿に来いよ。俺はそこにいるから
』

『わかつた！！ありがと、トマ』

クロノは礼を言った。

クロノは、城がある森へと向かった。ここが、400年前のガルディアなら、クロノ達が住んでるガルディアと同じ場所に城はあるはずなのだから

城についた。城は、クロノ達が住んでいるAD1000年のガルディア城と同じく白く三つの塔がならんでいた。クロノはおやるおそる城の扉を開けた。

ガシャン

『なんだ？お前！！さては、魔王の手先か？』

城に入ったとたん、クロノは、城の兵士に捕まつた。

『や、やめる！！俺は、そんなんじゃ・・・』

『おやめなさい。』

どこかで、聞い声だ。

『リーネ様！！』

クロノは声の方を見た。

その声の主は、マールだったのだ。マールは、白いドレスをきていた。そして、頭の冠には、王族であるあかしのガルディア王国の印があった。

そして、クロノは、思い出した。マールは、マールではなくマールディア王女。

ガルディア王国の王女だと。

『はなしなさい。この方は、わたしを助けてくださった恩人です。』

『は、そうとは知らず、すみませんでした。』

『クロノ、私についてきて。』

クロノは、黙つてマールの後ついていった。そして、螺旋状になっている石でできている階段を上つて一つの部屋へマールは、クロノを案内した。

クロノは、何がなんだかもうわけわからずじまいだった。まさか、自分の目の前にいるのは、あのマールディア王女だとは思もいもしなかつたから。

『えへへ。ピックリしたよな』

『・・・・・・・・・・・・』

クロノは黙っていた。

『「ごめんね。騙して、でも、見てみたかったの、このお城の外の世界を』

『マール・・・・・・』

『でも、嬉しかった。クロノと一緒にいられて・・・・・クロノ、私は
ね・・・・』

マールが何かを言いかけたとたん、突然また、ペンダントが光出した。

『え？？？何これ！――か、体が・・・・』

『マール？？？？』

『バラバラに・・・・・』

突然、マールの姿が半透明になつた。

『詩經』卷之三

『ペンドントは、いつもよつ激しく光だしてそして・・・・』
『クロノ・・・・いやあああああああああああああああ～～～～～～

『マール！！！！！！』

クロノは、メールの手をつかもうとしたが・・・・・

メールは、消えてしまった。

そして、クロノは、時間が止まつたように。固まつていた。

D600年にかけてしまつてこられたと・・・

そして、目の前で、また、メールが消えてしまつた事。

た。

そして、クロノは、その場に倒れこむよつて座つた。

『これから、どうしようかんだ……』

すると、遠くの方から、何やら声が聞こえた。

『ちよ～ちよ～とはなして……私は、クロノに用があるんだから……』

どこかで、聞いたことがある声だ……

ドゴン

勢い良く、ドアがあいた

クロノは、振り返る

そこに立っていたのは・・・・・ルッカ――

『ルッカ・・・・』

『クロノ!! こんな所にいたのね!! 冒険家のトマつて人から、あなたの居場所を聞いたわ!! あら、あの子は・・・?』

『・・・・・・・・・・・・・』

クロノは、うつむいた。そして、今までの事を話した。

『なるほどね・・・・・どこかで見た事あるって思つてたけど・・・・・彼女がマールディア王女だったのね・・・・でも、なぜ、ゲートが出ていないのに彼女は姿を消したんだろう・・・・・』

ルツカは、またブツブツと言いながら、考えだした。

『AD1000年の王女・・・・・AD600年の王女・・・・・』

クロノは、まだ、混乱していて、呆然としていた

『なるほどね・・・・・』

ルツカは、何か分かつたように言つた。

『クロノ！私の話を聞いて！！今は、AD600年。でも、ここにいたのは、AD1000年の王女マールディア。では、どうして、この時代の王女は今、私達の目の前にはいない・・・・そして、マールディア王女は消えてしまった。その、存在が、なくなつたかのよつこ、』

『どうもうりじだ？？？』

『つまづ、じつあつ事よーーーこいなればならない、王女AD600年の王女は、AD1000年のマールディア王女のご先祖様。

だけど、今ここにいなければならぬ王女はここにいない。AD600年の王女になにか、命の危機が迫っているんだわ！！だから、マールディア王女の存在が消えてしまった。何ものかが、AD600年の王女を暗殺しようともくろんでいる。だけど、私達がその暗殺計画を阻止できれば・・・』

クロノは立ちあがつた。

『マールを・・・助け出すことができる。』

『もう少しよしとよ。』

ルッカの眼鏡が光つた。

『クロノ急ぐわよ！早くしないと、AD600年の王女の命があぶない！！』

『おう！！』

クロノ達は、走つた。

マールを助けるために・・・

N02 消えた王女～400年の時を越えて 中編

『クロノ！－まずは、情報収集よ！お城の人聞いてみましょ』

ルッカは、螺旋状の階段を駆け足で下り、息を切らしながらいった。

『王様とか・・・何か分からぬかな？』

『さうね！－聞いてみましょ！』

クロノ達は、階段を下り、中央の大きな扉へ走った。

ドカン

いきおいよく開けたので、ものすごい音がした。

『な、なに事ですかな？』

王の間は、赤いじゅうたんが、中央の扉からまっすぐに引かれていて、その先には、一つの王様が座りそうな椅子があった。
そして、もう、ひとつ椅子に王冠をつけた王が座っていた。
クロノ達は、王のもとへ走った。

『おー！そなたたちは、リーネを助けていただいたお方と兵士たち

か聞きましたぞい。』

『そ、それが・・・』

クロノが事情を説明しようとしたら、ルッカが、後ろから蹴った

ポ力

「いた！！なにするんだよ！」

クロノは、小声でいった

「あんた、バカね、本当のこと話したら、大騒ぎよーー！」には、私にまかせて！！

『王様、リーネ様は、誘拐をされていたんですね！私達は、リーネ様を助けました。ですが、リーネ様を誘拐した犯人は、まだつかまつていません』

『なんじゃとーー。』

『ですが、お待ちください。私達が、必ずや、誘拐犯を懲らしめてやりますわ！』

『おお～なんとーー、そなたたいが！』

『ええー、そこで、お聞きしたい事があるのですー。』

『なんなりと』

『王様、最近、何か気になる事とか、ないですか？どんな小さな事でもいいわ！』

『そ、うじやな、』

王は、少し間をあけ考えた。

『最近、なにやら、大臣が西の古い教会にこそこそと通っているんじや・・・』

『王様に仕える大臣が・・・？』

ルッカは、ボソッと言つた。

『王様！ 大臣は今どこに？？』

『大臣は、右の奥の階段を上つた塔の「えじや」』

『わかりました。ありがとうございます！』

ルッカは、お辞儀をフカブカとした。

『急ぐわよ！ クロノ！』

クロノ達は、また、螺旋状の階段を昇つた。

昇り終えようとした時なにやら、老人の声が聞こえた

シツツ！ 誰かいるわ・・・

『なぜだ・・・リーネは・・・今、あの教会に閉じ込めたはず・・・』

。

なんですかって！！

『まさか・・・』

うわーーーっ！ちへくるーーー隠れてーーー

クロノ達は、そばにあったカブトの後ろに隠れた。
クロノは、ちらつとのぞいた、その人物は

大臣だった。

まじかよ・・・

大臣が去った後、クロノ達は、カブトの後ろから出てきた。

『なぜ、大臣が、自分が仕える王女を誘拐しなきゃならないんだ・・・？』

『そうね・・・不自然だわ・・・とりあえず、行ってみましょうー！西の教会へーーー』

西の教会へついたクロノ達は、さつそく中に入った。すると、中は、ごく普通の教会だった。教会の中は数人のシスターがいた

『ん~何も、変な感じはないわね~』

ルツカは、あたりを調べた

クロノは、シスターに声をかけた

『あの~』

『私達は、世界の平和をお祈りしますの・・・イヒヒヒ』

シスターは、何か様子が、可笑しい。クロノはそう思った。

そして、クロノはふと光る物に目がいった

『なんだ?これ?』

『何？どうしたの？』

『カミカザリだ』

『ちょっと、見せて』

ルッカは、クロノが持っているカミカザリを取った

『…………これ、ガルディア王国の紋章だわ！…』

『なんだって？』

『どうやら、バレちゃつたみたいね。』

『え？！』

すると、クロノ達のまわりには・・・・4人のシスターがと、思つたら、シスターの姿がヘビのようなモンスターに変わった

『か、囮まれた』

『ちょうどいいわ！私が開発した武器の使い道さよ……』

ルッカはポッケからピストルを出した

『やるわよーークロノ！』

『おうーー』

ヘビの1匹がルッカにおそつてきた。

その瞬間、ルッカは、ピストルを打った
すると、ルッカの後ろからもう一匹のヘビが・・・・・

が、クロノによってそのヘビは倒された。

『めんどうせいから、いつきにやるかー』

『え？どうするの？』

クロノは刀を左手で持ったそして、おもむりにふりまわした。

『ギャ』

『グエ

クロノは一気にモンスターを倒した

『やつた、やつたわよクロノ！』

『ケケケケ』

が、一匹まだ残っていた

『キヤー！ー！ー！』

そのヘビは、ルッカをおそつて、ルッカは、吹き飛ばされた

すると、後ろから何ものかがきた

『最後まで、気をぬくなーーー！』

シャキーン

『ぐええええええ！』

モンスターは、一撃で倒れた

『だ、誰だ！！！』

クロノは何ものかにさけんだ

N03 消えた王女 後編／西の教会の謎

クロノ達の目の前に現れた

その何ものかは

緑のマントをはためかせていた

その何者かは、顔はカエルだが人間のように手足がありちゃんと服もきているカエル男だった。

『か、かえる？？』

カエル男は、後ろにいるクロノ達の方に体を向かせた。

『ゲロゲロ』

カエル男は、ホッペタの袋をプクプクとカエルの様に膨らませた

ルッカは、意識をとりもどした。

『キャツ！な、何？！カエル？』

カエル男は、クロノ達の方をチラつとみた。

『お前達も、リーネ様を助けにきたのか？』

『あ、あ、そうだよ』

クロノは、あたふたして答えた。

『よかつたら、一緒に戦ってくれないか？』

『クロノ、こうなつたらカエル男でもなんでもいいわ！一緒に戦つてもらいましょ』

ルッカは、クロノに耳うちした

『俺達も、リーネ様を助けなきやならないんだ。だから・・・君が一緒に来てくれるといいよ！』

『そりゃ！よろしくな！俺は、グレ・・・いや、カエルだ！カエルでいいぜ！』

『こんな、なりじや分かつてもらえないしな・・・』

カエルは、手を高くグーの形をさせ、笑顔で自己紹介をした後、クロノ達に聞こえないような声でボソッと何かを言つた。

クロノは、？”が頭の上に出るるように頭を右に傾けた

『カエルか、俺は、クロノ！』

『わ、私は、ルッカよ。カエルさんよろしくね』

ルッカは、ちょっと不安そうに言つた

『この、教会には、隠し扉があるはずだ！！！それを、探すんだ！』

カエルが言った。

『分かつたわ！！手分けして探しよ！』

そういって3人は、教会の中を隅々まで探した。

ルッカは、椅子の下を

カエルは、壁をここまかく探した。

クロノは、一人と違つて、何かを探す様に辺りをキヨロキヨロと見ていた。

『ううん。何も可笑しい所はないわ』

ルッカは、疲れたように言った

『こっちも、別に変わった所はないぜ』

カエルは、ホッペタをプクプクさせて言った

ルッカは、クロノをチラッとみた

『クロノ！！何やつてんのよ！！あんたも、真面目に探しなさいよ

！！』

ルツカは、ただつたているだけのクロノに怒つたすると、'クロノはおもむろに教会の隅にある、パイプオルガンへ目をやつた。

『もしかしたら……』

ポツリとクロノは言った

『え？ 何？』

ルツカは、クロノの言葉が聞き取れなかつた
クロノは、パイプオルガンを弾いた

『何、やつてんのよ！』

ルツカは呆れた様にいつたすると、

“ド、ゴン”

とゆう音がなり、ただの壁だつた所が扉になつた

『やつたぜ！－クロノ！』 カエルは、クロノの背中を叩いた

『まさか、オルガンがドアを開く鍵になつていたなんて……』

ルツカは、ブツブツ言い始めた

カエルは、ドアの前に立つた

『どうやら……この奥は、奴らの巣らしいな』

『よしー行ーいー』

クロノがそうゆうと、カエルとルッカは、うなずいたそして、奥のドアへ進んだ

中に入ると、モンスターがうじゅうじゅといったカエルとルッカとクロノは、柱のすみに隠れた

『こんなに、沢山いるよ・・・』

クロノは、不安そうに言った

『ひつとぱし、やるか！』

カエルは、剣を握り、飛び出せりとしたその時。

『待つて！！』

ルッカがカエルを止めた

『私に考えがあるの！私が発明した催眠音波機を使えばこいつら、ミンナ、オネンねするわー！』

『さいみんおんぱき？？？』

カエルは、大きな瞳をクリクリさせて不思議そうに言った

『ルッカは、こう見えても発明家なんだ！』

クロノはカエルに説明した

『二人とも耳をふさいでおいて！』

そう言ってルツカは、水色のピストルを出した
クロノとカエルは耳をふさいだ

ルツカは、そのピストルを高くあげて引き金を引いたすると、ピス
トルの穴から緑の光線が出て、部屋全体を包んだ

ピピピピ

緑の光線は消えた

『もういいわよ！――一人とも！』

ルツカがそうゆうと、二人は耳から手を離した

『わ――』

クロノは辺りを見渡しておどろいた

モンスター達は、ミンナ、ぐつすり眠っていた

『すげ～ミンナ眠っている！』

カエルも驚いた

『どう？これが私の発明！おほほほほほ』

ルツカは、高笑いをした

『すゞいな！！ルツカのはつめいとやらは…』

カエルはルツカを尊敬の眼差しで見つめた

『どうも』

ルツカのメガネが輝いた

『よし！今のうちに奥の部屋へ！』

クロノがそう言つてまた、三人は奥へと急いだ奥に進むと、部屋があり、またそこにもパイプオルガンがあつた

『きっと、このパイプオルガンも何かを開ける鍵になつてるわ』

ルツカは、メガネを上下に動かしながら言つた

『よし！弾いてみよ』

そう言つて、クロノは、またパイプオルガンを弾いた

ドカン

奥から、教会の時と同じ様な音が聞こえた

『スランバーランドの歴史の船団ねー。あれもこれも』

『俺達は、犯人の近くまできてるはずだー。』からはじつかりと気をはつていいくぞ

カエルがそう言つと、クロノとルツカはうなずいた
クロノ達は奥の部屋へと進んだすると、突き当たりに扉があつた

『 もう そ う だ ・ ・ ・ 』

クロノは緊張しながら言った。

『 そ う だ な 』

クロノ達は、息をひそめ戦いの準備をした・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6901d/>

時をかける翼

2010年10月21日20時23分発行